令和８年度
中野市立豊田中学校
被爆地派遣事業報告書（長崎市）



①　「長崎研修」

神田　雄斗

②　「平和に向けて考えたこと」

畠山　せな

長崎研修

中野市立豊田中学校　3年　神田雄斗

青少年ピースフォーラムでは、被爆体験者の清野定廣さんの講演がありました。清野さんは原爆を「無差別大量破壊殺人核兵器」と称し、それがどれほど恐ろしいものなのかを語ってくれました。原爆は爆風が 50%、熱風が 35%、放射線が 15%で、それぞれ秒速 444m の速さの爆風と 3000 度から 4000 度の鉄が確実に溶ける熱風で街は破壊され、放射線は地面や空中で跳ね返り、助かった可能性のある人々をたくさん苦しめました。清野さんは 8 歳の時瓦礫だらけの街の中を 2 時間歩いただけなのに、89 歳になった今でも体の中には放射線由来の悪いものが残っていると医者から言われたそうです。清野さんは被爆した当時、被爆中心地からは 12km も離れた疎開先の寺で過ごしていたところ、原爆が投下されました。その後、なんとか合流した姉と共に佐賀へ疎開しましたが、放射線による内部出血で亡くなったそうです。疎開で佐賀へ向かう途中、清野さんは死んだ人々に蛆虫が湧いているのを見て涙が出たそうです。さらに疎開先では火傷の後などによって、差別された人もいたと聞きました。



その後、僕は班に分かれて、近くの平和公園を散策しました。原爆落下の中心地には石碑が立っていました。そこでは地表の温度が 4000 度に達し、長崎の人口の三分の一以上の人々が亡くなったそうです。その近くの下の川には当時、原爆の熱線によって皮膚がただれた人たちが水を求めて集まったようです。僕はこの話を聞いたり、公園を散策したりして、何がなんでも核兵器の使用や所持はしてはいけないと感じました。特に戦争に参加した兵士だけでなく、民間人が多く亡くなっているのはおかしいです。

原爆資料館では、原爆の歴史や太平洋戦争の詳細を見ました。長崎と広島に落とされた原爆はそれぞれ違うようで、長崎はファットマンで広島はリトルボーイと名付けられていました。ファットマンの方が威力は大きかったようですが、長崎の山に囲まれた地形により、被害者は広島よりも少なかったようです。原爆資料館で僕が一番驚いたのは今もなお核兵器を持つ国がたくさんあることです。ロシアとアメリカは 5000 発以上の核兵器を所持しています。そして意外だったのはインドが 170 発ほどの核兵器を所持していたことです。こんなに核兵器を所持している国があるなら、核兵器をなくすのは容易なことではないと実感しました。



長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典では、長崎市長の鈴木史朗さんが長崎平和宣言を読んだところが印象に残っています。特に印象に残っているのは「核兵器に依存する国は、核兵器を実際に使用しなくても、保有することで他国に攻撃を思いとどまらせることができるという「核抑止論」を主張します。しかし、戦争という極限状況の中で自国の存亡を懸けた究極の判断を迫られたとき、それでもなお「核のボタン」を押さないと、誰が言い切れるのでしょうか」という文章です。核抑止論を真っ向から否定し核などこの世には必要ないと強く訴えていました。そして核のボタンという表現がとても的確で、落とそうと思えば簡単に落とせる核を脅しの道具として使うのは、これからの世界でさらに核が使用される可能性があることを示唆していると僕は感じました。また、この文からこの世に核兵器は絶対にいらないという強い意志を感じたので、はっきりと覚えています。

僕は 2 日間、長崎で平和について学び、そこから感じたことは、「核のボタン」を持たないことが何よりも重要だということです。終戦から 81 年たって兵器はさらなる進化を遂げ、今では「核以上のボタン」を持つ国もあるでしょう。「核以上のボタン」を持つ国は戦争をあまり恐れないようになるでしょう。それではいけません。現在世界で 200 近くある国の意見が全て合致することはありません。そこから話し合いになるはずだった機会を戦争によって消してしまうのはあまりにももったいないです。武力を捨てることを恐れず、人間にしかできない対話により世界はより平和になると僕は信じています。

平和に向けて考えたこと

中野市立豊田中学校　３年　畠山せな



１日目は被爆体験講話で清野定廣さんの話を聞きました。清野さんは当時８歳で、12km 離れた深堀村のお寺で遊んでいる時に、爆風が起きました。立っていられないくらいの強風で、原子爆弾の威力は、50%は爆風で、35%は熱線で、15%は放射線でした。熱線は 3000～4000 度もあって、放射線は一回浴びてしまうと体に一生残ってしまうのが怖いと思いました。被爆前は建物が沢山あってグラウンドなどもありましたが、被爆後は建物がほとんどなくなっていました。なんとか疎開先に向かい列車に乗ることができた人々も多くの方が列車の中で亡くなってしまったり、トンネルや道で亡くなったりした人が沢山いて、その光景をみた清野さんもショックだったと思いました。清野さんは兄妹４人で佐賀県に疎開して、清野さんの当時 20 歳のお姉さんは兵器工場で働いている時に原爆が落とされて、お姉さんは無事だったけど、一週間後に放射能障害を発症して髪の毛が抜けてしまったりして亡くなってしまったという話を聞いて、放射線を浴びてしまったら、その時は無事でも一生体に残るし、亡くなってしまうことがあるのがとても怖いなと思いました。講話を聞いたあとは共通学習がありました。浦上天主堂の遺壁は、爆発の強い力で建物のほとんどが壊れてしまったけど原爆で残った壁の一部です。被爆当時の地層を見ました。中には土の中に埋まっている缶や瓶、家の瓦などが埋まっていました。平和公園にある平和の泉に残されている石碑には少女の文章が残されており、原子爆弾によって大火傷を負って水を求めながら亡くなってしまった人が沢山いることを感じました。水が欲しくて川の水を飲もうとしたけど油のような物が浮いていると書いてあって、飲みものも食べるものも全然なかったことを改めて知りました。その近くには平和を祈るために作られた鐘があって、二度と戦争や原爆による悲しい出来事が起きないようにするという意味が込められています。その鐘が鳴っているところを見学で見ることができました。平和祈念像をとっても近いところで見ることができました。原爆資料館には、長崎に落とされたファットマンという原子爆弾を再現したものがあって想像していたものよりも大きかったです。熱線で溶けてしまった瓶は、熱で変形していました。他にも破けてしまっている服などが沢山ありました。



２日目は長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参加しました。原爆について学ぶことはあったけど、実際に長崎にきて式典に参加するのは初めてでした。式典会場には、被爆された方の親族など日本全国や海外からも多くの人が参加しました。会場全員で黙とうをしました。式典では長崎市長の平和宣言や平和への誓いも聞きました。平和宣言では、当時の状況について話していて、爆心地の方へ行くと黒焦げで炭化してしまった人、手足がない人が右往左往していたそうです。浦上川にたどりつくと、焼けただれた多くの人が油や血などが浮いて汚れた水を飲んでなくなってしまっていたことを話してくださいました。13 歳で被爆してしまった吉田さんの顔には生涯消えることのない大きな傷跡が残り、周囲からの視線に苦しみました。かろうじて死を免れた人も心身に深い傷を負って、放射線の影響でがんなどが発症することへの不安と恐怖を一生抱え続けているそうです。平和への誓いでは原爆が落とされた時、家屋が倒壊し、障子がやぶけて、小さな体が庭に叩きつけられるくらいの爆風だったとの話がありました。爆風は 444m/秒の勢いで窓ガラスが割れてしまうような威力があったことを知りました。式典のあとは意見交換会がありました。テーマは「違うってどんなこと？違うって悪いこと？」がテーマで最初は人それぞれ違うことを出しあいました。性格や出身や話す言葉や好きなことなどは人それぞれ違う考えなのに、話す言葉や肌の色が違うだけで差別やいじめにつながっていることがあります。偏見や差別にならないためにはどうすればいいかを考えました。班で出た意見では、見た目だけで判断をしないで相手のこと、他の国のこと、言語などを知ってそれを楽しむという考えがとてもいいなと思いました。平和への道のりは遠いかもしれません。でも、その手がかりは自分の身のまわりに、自分の考え方にあるのではないかと考えることができました。